

第 25 回 再びドイツへ 神聖ローマ帝国とは？

— 後篇 神聖ローマ帝国と医学 —

(前篇「ドイツバイエルン州の旅」から続く)

西ローマ帝国は、476 年ゲルマン民族の一部族ゴート族によるローマ攻略によって滅亡したが、391 年以來ローマ国教となっていたキリスト教は侵入してきた異民族の間にも広がり、彼らの多くに受け入れられた。5 世紀にゲルマン民族によって建国されたフランク王国の国王が 800 年ローマ教皇によって皇帝戴冠され、西ローマ帝国が復活した。962 年ザクセン人オットー I 世(大帝)によるザクセン王朝が事実上のドイツ王国の誕生とされ、神聖ローマ帝国の開基とされる。神聖ローマ帝国がヨーロッパの大部分を支配した中世はローマ教皇権と政治的統治権(世俗権)の競合の歴史でもあるという見方がある。教皇による皇帝の破門とその赦免を願った「カノッサの屈辱」(1076 年)やその後の皇帝による教皇追放など、現代のわれわれに多くの興味深い貴重なエピソードを伝えている。中世は 1453 年トルコ人の攻撃による東ローマのコンスタンティノープル陥落でおわるが、神聖ローマ帝国は近世まで続き、1805 年ナポレオン軍に敗れたフランツ II 世の解散宣言で実質上の幕をとじた。

医学に関しては、中世における発展は遅々としていたように見える。実用的医学体系が発達したといわれるローマ世界ではその末期には神秘的・魔術的なものへの信仰が強まったとされ、キリスト教の受容によってさらにその傾向が強まったと考えられる。しかしながら聖書のなかのキリストの病気治療を再現することは神のみ旨にかなうこととされ、慈善病院などの施療所は中世の早期から存在していたようである。中世ヨーロッパでは迷信や魔術が重要であったとはいえ、医療において教会や修道院が大きな役割を果たした。中世ヨーロッパにおける病気治療法の発展には大学の誕生(9 世紀サレルノ大学、12 世紀-14 世紀ドイツ・フランス・イングランドなど)やイスラム教の医学などが貢献している。大学では神秘的医学とは対照的な医学教育がなされ、イスラム教の医学は度重なる十字軍遠征によってヨーロッパへ伝えられた。中世が進んで社会風刺が天国での報いよりも現世の利益に関心を寄せるようになってきたことや、ライやペスト(黒死病:13 世紀半ば、ヨーロッパ人口の 1/4 が死亡)の流行などの影響により、医者や宿泊所としての修道院の医学は衰退し、病院は教会から市や町に移されていった(12 世紀-13 世紀)。中世後期(14 世紀-15 世紀)のヨーロッパ社会では人口増加による食糧不足と衛生状態悪化があったとされ、百年戦争やペストの流行などで結局ヨーロッパ人口は 1/3 まで減少した。

15 世紀以降ヨーロッパは、ルネサンス、宗教改革、大航海時代、市民革命、産業革命などに象徴される近世へと続く。

まとめ

この度のドイツ旅行は南部バイエルン州の都市に限られていたが、神聖ローマ帝国という観点からみて、ドイツのみならずヨーロッパには、ローマ時代から中世を通して歴史的に社会思想の根底にキリスト教精神が存在し、強く影響している。

医療倫理においても伝統的にキリスト教が果たした役割が色濃く反映され、それが生命現象そのものにかかわるような現代の医学研究や医療の倫理的妥当性をグローバルに支えていると考える。

参考文献

菊池良生：「神聖ローマ帝国」講談社現代新書 1673,第 11 刷,講談社,東京,2008 年